

サクラソウの花に傷をつけてしまうことがあり、とても花のつくりに適応して花粉を運んでいるようにはみえません。マルハナバチ類の他に、もっとサクラソウの花のつくりに適応した花粉の運び屋がいなければ、サクラソウが二通りもの花のつくりを進化させたことの説明がつかないという、あらたな謎が生まれています。

(2) の、サクラソウの咲く頃の秋が瀬には、昆虫が少ないことの原因については、まだ解っていません。秋が瀬の田島ヶ原では、現在では冬に野焼きをするので、その影響があるかも知れませんが、野焼きをしないときからのことなので不思議です。サクラソウの花の最盛期を過ぎた頃から、クロマルハナバチがやってきたり、さまざまな昆虫が豊富に見られるようになることから、北西の冷たい風が吹き抜ける秋が瀬は、周辺にくらべて暖くなるのが遅いためではないかと考えたりしています。

(3) の、サクラソウの花粉を運ぶ昆虫がいないのに、秋が瀬でたくさんの種子が実るのはなぜかということについては、いろいろなことが解ってきました。一つは、サクラソウの花粉を運ぶ昆虫がいないのではなくて、そのような昆虫がいてもなかなか目に触れないということでした。田島ヶ原で観察したクロマルハナバチの場合は、すでに周りにノウルシやオギが茂っていたために、目の前に飛んでこない気が付きませんでした。もう一つは、サクラソウの種子が実るためには、花のつくりの異なった花粉によって受粉することが必要で、自分の花粉で受粉しても、種子が実らないのが普通です。しかし、中には自分の花粉で受粉して、種子がよく実る個体もあるのです。秋が瀬の「田島ヶ原サクラソウ自生地」にも、自分の花粉で受粉して種子を実らせることのできる個体はかなりありますから、花粉を運ぶ昆虫がいないとしても、たくさんの種子が実るというわけです。しかし、これで謎解きが終わった訳ではないのです。田島ヶ原のサクラソウを調べて見ると、サクラソウの花の最盛期になる前の、まだクロマルハ

ナバチの現れないときに、なぜかどの花にも自分以外の花粉がかなり付着しているのです。だから種子がよく実るのかも知れません。それでは、この花粉がどのようにして運ばれてきたのか、ここでもあらたな謎が生まれています。

ところで、最近のテレビ・新聞・書物には、「田島ヶ原サクラソウ自生地の周辺で開発が進んだ結果、花粉を運ぶ昆虫が少なくなり、種子をつけない個体が増えてきたので、サクラソウ群落の存続が困難になった。」というような情報が目立つようです。田島ヶ原では、花粉を運ぶ昆虫の種類と量的な変化や、種子を付けない個体数の変化がわかるような調査は、これまで行われたことはありません。そして、田島ヶ原のこれらの情報の根拠になった資料をみたことありません。上で今まで述べてきた真実とほど遠いこれらの情報は、自然保護のありかたに対する警鐘として出されたものかも知れません。しかし、いまでは情報が一人歩きを始めています。マスコミの流した誤った情報を訂正することは、極めて困難なことだと思いますが、正しい情報の提供を続けることで、やがては社会に正しく理解されるようになると思います。まずは、手始めにこの紙面を拝借して、正しい情報を発信しましたので、ぜひ、この正しい情報を周りの人々に伝えてくださると幸いです。

まとめになります。『田島ヶ原サクラソウ自生地』を保護していくためには、サクラソウのことだけではなく、他にも解明しなければならないことがたくさんあります。それには多くの時間・費用・労力を必要としますが、なにより大切なことは、科学的な調査や実験に裏付けられた正確な情報を得ることです。間違っていたり不正確な裏付けによって保護対策が行われた場合には、浪費したり、効果があがらないばかりか、『田島ヶ原サクラソウ自生地』の価値を著しく低下させてしまう恐れさえあります。『田島ヶ原サクラソウ自生地』の保護や管理に関わるには、このことを肝に銘じておかなければならないと、つくづく感じました。(浦和市文化財保護審議会委員)

田島ヶ原サクラソウ自生地保護増殖実験調査

浦和市教育委員会では、田島ヶ原サクラソウ自生地において成育状況の実態調査などを行い、その結果をもとに、自生地の保護保存にあたってきましたが、いよいよ平成8年度からは国庫補助事業として、「特別天然記念物田島ヶ原サクラソウ自生地保護増殖実験調査」を開始しました。田島ヶ原のサクラソウ自生地は、荒川流域の他の自生地が消滅していく中で、地元の方々の保護に対する熱意に見守られて、

戦中、戦後の混乱期、そして開発が激化した高度成長期を切り抜け、生き延びてきました。この自生地を、さらに科学的な資料に基づいた計画のもとで、現状維持のレベルから一歩前進させようという事業、それがこの「保護増殖実験調査」です。

初年度である平成8年度は、別表の委員による検討委員会を2回予定し、10月8日の第1回会議では、現地視察をはさんで、保護増殖実験調査の全体計画及